

アクセル・カーン著

モラルのある人は、そんなことはしない

科学の進歩と倫理のはざま

本書は、その副題が示しているように、科学の進歩がもたらす倫理的課題について語っている。著者のアイセル・カーンはヨーロッパを代表する遺伝学者であり、それゆえ、本書で扱われている科学は、生命科学が中心となっているが、その射程範囲はかなり広い。安楽死、出生前診断、人工妊娠中絶、生殖医療、遺伝子検査、脳科学、臓器移植など、これまで倫理的な議論を引き起こしてきたテーマは、ほとんどすべて触れら

倫理的議論の別種のおもしろさ

読者に対して刺激的な問題提起となる

小原 克博

る。由とは何か、尊厳とは何か、響を美感できる点にある。

科学と倫理の関係を論じている類書は少なからず存在するが、本書ならではの醍醐味をいくつか指摘することができる。一つは、一章を削いで詳細に記されている、カーンおよび彼の家族史を通じて垣間見るヨーロッパ近現代史の一断面が、彼や彼を取り善く社会の倫理的判断に及ぼした影トルは、著者の父親が子ども時代の著者を叱責した際、合いを、著者の批判的視線を通じ見ることができ、一般に生命科学や生命倫理の問題は、アメリカ的な背景において紹介され、理解されることが多い。しかし、本書を通じて、一つひとつ倫理的課題の是非にとまらず、問題設定そのものにおいて、フランスがアメリカとは異なる議論をしてきたことを知る事ができる。さらに、自らの見解が国内外の大勢の意見と時と異なっていることを認めながら、著者が自説を貫いた原則の下に骨太を展開している点は、読者に対して刺激的な問題提起となっている。訳者は「あるとがき」で適切にもマイケル・サンデルと対比させているが、サンデルに飽き足らない読者には、本書は倫理的議論の別種のおもしろさを教えてくれるだろう。

倫理は、個人の次元においても、社会の次元においても、時代状況とのせめぎ合い、価値相対主義に陥らなみ出されてくることを如実に伝えている。

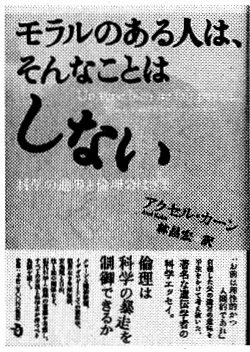
ある。ユダヤ系フランス人である著者は、ユダヤ人にもたらされた災禍に言及しながら、優生学をはじめとする近代科学の一部が、人種差別的増長や、ナチスによって精神薄弱者と見なされた人々の殺害につながっていたことを指摘する。科学はイデオロギーによって悪用される可能性があることを、著者は多くの事例を引きながら警告し、科学には倫理が必要であると語る。議論や安全性を省略し、でも科学的成果をあげる

著者は自らを人間中心主義者、不可知論者(神など超越的な存在を人間は知り得ないという立場)と見なしているが、同時に、母親

体において貫かれている。

遺伝学者である著者は、

★アクセル・カーンは医師・遺伝学者。国立保健医学研究所研究部長、パリ・デカルト大学学長。本書が初の邦訳。一九四四年生。



四六判・271頁・2625円
トランスビュー
978-4-901510-98-1

著者は自らを人間中心主義者、不可知論者(神など超越的な存在を人間は知り得ないという立場)と見なしているが、同時に、母親社会における価値のせめぎあいを、著者の批判的視線を通じ見ることができ、一般に生命科学や生命倫理の問題は、アメリカ的な背景において紹介され、理解されることが多い。しかし、本書を通じて、一つひとつ倫理的課題の是非にとまらず、問題設定そのものにおいて、フランスがアメリカとは異なる議論をしてきたことを知る事ができる。さらに、自らの見解が国内外の大勢の意見と時と異なっていることを認めながら、著者が自説を貫いた原則の下に骨太を展開している点は、読者に対して刺激的な問題提起となっている。訳者は「あるとがき」で適切にもマイケル・サンデルと対比させているが、サンデルに飽き足らない読者には、本書は倫理的議論の別種のおもしろさを教えてくれるだろう。